

芥川龍之介『魔術』とバラモン教的宗教観

中 村 夏 歩

一

芥川龍之介の『魔術』(『赤い鳥』一九二〇・二)は、谷崎潤一郎の『ハッサン・カンの妖術』(『中央公論』一九一七・十一)に登場するマティラム・ミスラという人物が使われている。『魔術』ではこのマティラム・ミスラ(以下、ミスラ)の紹介文に「もう皆さんの中にも、御存じの方が少くないかも知れません。」という一文が入っていることから、谷崎のミスラを意識していることがわかる。両作品においてミスラが「ハッサン・カン」という名高い婆羅門の秘法を学んだ、「魔術」を使う人物であることは一致している。そして、それぞれの話の主人公である「私」が、ミスラと出会った話が進んでいく。

しかし、ミスラの振る舞いは、二つの作品で全く異なっている。谷崎の小説では、ミスラは西洋の科学的思想を学び、それを取り入れようとしているが、自分は相反する非科学的な魔法の力を実際に使え、須弥山の世界に行くことができる。東洋の神秘的世界にどうしてもリアリティを感じてしまい、その板挟みで悩む青年である。こちらのミスラは、小説内で自分の知る東洋の宗教的世界観を長々と語り、最後に「私」に術によって須弥山の世界を体験させる。「私」はそこで死んだ母と再会し、

母の言葉で改心するという救いを受けている。谷崎のミスラは魔術を使えはするが、現世の問題で悩み考えている、「私」と同じ次元にいる人間であるといえる。

それに対し芥川のミスラは、魔術を「進歩した催眠術」だと「私」に説明し、欲心を捨てれば「誰にでも造作なく使え」るものだとして物を動かすなどの術を見せ、最後に「私」が魔術家になった幻覚を見せる。そして結果的に「私」に魔術を使う資格がない人間であることを思い知らせ、これを伝える。この作品のミスラは、「私」のことを魔術を使つて試し、最後に「私をたしなめ」るのである。芥川の小説では魔術の宗教性などには触れられず、その因果応報的な話の流れが重視される。

この二つを比べてみると、結末で「私」が登場人物の態度や言葉で反省し、感化されるのは共通しているが、谷崎の作品では「私」をたしなめるのは「母」であり、結果的に「私」を改心させたのは人知を超えた「須弥山の世界」である。それに対し芥川の作品では、「私」をたしなめたのは人間として現実に存在しているミスラなのである。この芥川のミスラは明らかに、「人間」であり欲を持つ「私」とは違った次元にいて、「須弥山の世界」と同じように人知を超えた存在のように描かれている。このミスラの存在に、芥川の『魔術』には無い宗教性を見出すことがで

きないだろうか。芥川のミスラは果たして物語内においてどういった立場にいて、どのような役目を持っているのか。本稿では、芥川の『魔術』を宗教的な視点で検討し、考察をしていきたいと思う。

二

宗教的な解釈をするにあたって、ここではミスラが師事していた「名高い婆羅門」であるハッサン・カンの属するバラモン教を元に考えていきたい。バラモン教とは、古代インド宗教の中の、ヒンドゥー教の前身である宗教である。四姓というカースト制があり、そのカーストの一番上に属するのは僧侶や祭司で、それらの人々が「婆羅門」と呼ばれる。魔術師のハッサン・カンはこの婆羅門である。婆羅門は宗教的な儀式や呪術を中心となつて執り行う役目などを持つ。バラモン教の儀式の方法で最も基本的な形態は「火」を使ったもので、火の中に、神々に献上する供物や神酒を入れるというものである。儀式中に火を取り扱えるのは、荘厳で規模の大きい儀式であればバラモン教で一番偉いとされる祭司、各家庭で日常的に行われる小規模なものならその家の家長となり、つまり、儀式中火を扱えるのは、その場で一番強い権力の人間、支配者的立場の者だけなのである。これを踏まえると、物語内の要素としても「火」が重要になってくる。ゆえに、作品内に登場する「火」を中心に話の流れを追ひ、考察をしていきたい。

物語には大きく分けて二種類の「火」が登場する。ひとつは物語の前半、ミスラの部屋で灯っている「石油ランプの光」で、もう一つは、「私」がミスラに見せられた夢の世界の部屋にある「暖炉の火」である。まず、「石油ランプ」から考察を進めていきたい。

始め、「私」が雨の中馬車でミスラの家にやってきて、ミスラが家の

中から「石油ランプの芯を捻りながら」登場する。ここで、火は車夫の持つ「提灯の明り」からミスラの持つ「石油ランプ」へと移行する。そして、「うす暗い石油ランプの光」が照らした室内に二人は入る。ミスラから勧められた葉巻を「私」は手に取り、二人でマッチを使い火をつける。そして、ミスラの魔術が始まる。

この「提灯の明り」は宗教的な問題には関係が無いと思われる。ここで取り扱うのは儀式的空間内で使われる火であり、屋外で実用的に使われた「提灯の明り」は該当しないと考えるであろう。

また「タバコ」は、二人がそれぞれマッチを使って火をつけている。これは、「石油ランプ」を扱っているのはたとえミスラであっても、この空間の「火」を「扱う主導権が完全にミスラに渡っているのではなく、まだ「私」とミスラが同等の立ち位置にいますと考えられる。

そして、魔術は「私」に四つ見せられる。一つ目は、テーブル掛けの花の模様が本物となり、二つ目は石油ランプが勢いよく回り出す。三つ目は本棚の書物が空中を飛びまわり、そして四つ目が、「私」が見せられた幻覚である。四つ目の幻覚の魔術が、「私」の目的が魔術を見ることから習うことになつてから、「私」に見せることを真に目的とした魔術であることは確かだろう。これを除いた三つの魔術は、四つ目に比べて手品かのような印象を受けるものばかりだが、二つ目のランプの魔術だけ特徴的な描写がある。そこに注目したい。

他の魔術は「感嘆の声を洩し」たり、「呆気にとられて見て」いたり「私」は驚愕している様子であるのに対し、このランプの魔術だけは、最初こそ火事にならないかとハラハラしているが、見ているうち「度胸が据つて」、ランプの中の焰を「眼も離さず」に「美しい」と感じながら見つめ、「火」に魅入ってしまったような描写がされているのである。

そして、その後「ランプの光」は四つ目の幻覚の魔術に入る直前に「私」に「まともに石油ランプの光を浴びた（略）ミスラ君の顔」を見せ、幻覚から覚めた後にも「まだうす暗い石油ランプの光を浴びながら、（略）微笑を浮べているミスラ君」を印象的に照らし出している。

魔術が始まってからの「石油ランプ」関連の描写で、儀式の「火」である「石油ランプの火」を扱っている人物は誰かと考えると、葉巻を吸う際に二人でマツチを使っているころまではまだ定まらないが、ランプの火を使った魔術で「私」を魅了した時点で「火」を扱っている支配者的立場の人物はミスラだということになる。「私」はその火の魔術に魅せられていて、それからの第四の魔術で幻覚を見る直前と直後に「火」に照らされたミスラの顔を「じっと見上げ」る描写は、ミスラの「火」や第四の魔術に対する支配者的要素を強めている。そうすると、「ランプの火」はミスラを支配者の立場だと示すだけではなく、第四の魔術にも関わっている可能性が出てくる。

岸規子氏の論文を始め複数の先行研究でも言われるように、この第四の魔術の前後に、現実と魔術の世界の境目を作り出す「呪文」として「御婆サン。御婆サン。…」と始まるカタカナのミスラの台詞が注目されている。しかし、この一文だけで簡単に魔術にかかってしまうとは思えない。この言葉は魔術の世界に入る呪文、つまり単なるきっかけにすぎないのではないだろうか。

では、どこで実際に術をかけたのかとなると、この描写の異なっている第二の魔術のときであると考えられる。「私」を不思議に魅了した「ランプ」の魔術から「私」の意識を操る準備は始まっており、その後もう一度「私」に魔術をまだ習う気があるかどうかを確認する。欲心が無いかどうか疑わしいが、教えてもらうことを諦めるそぶりのない「私」

を試すため、呪文を唱え「私」の意識を幻覚の世界に連れて行ったということになる。「石油ランプの光」によって魔術をかけられた「私」が、魔術の世界に入る直前と直後に、ミスラの顔をその「火」の中に見るというのも、ミスラが「私」の意識を「火」を通して支配しているということの暗示であると考えられる。

三

ここから「私」の意識はミスラに見せられた魔術の世界の中に入っていくのだが、ここで「私」は真杉氏の論²でいうところの「ミスラに仕掛けられた魔術空間を主体的に生きる」経験をする。つまり、「私」はこの空間で自由に振る舞っているように思っているが、魔術を仕掛けたのはミスラであり、この空間の支配者もミスラであろことが考えられる。しかし、この空間に直接ミスラが出てくることは無い。では、ミスラはどのような立ち位置にいるのか。

「私」の意識は魔術の世界に入り、舞台は「魔術を教わってから、一月ばかりたった」「銀座のある倶楽部の一室」に移る。魔術が使えようになった「私」と友人たちが「暖炉」の前で談笑としている。この世界の「火」は、この「暖炉」である。その火の中に友人の一人が「吸いさしの葉巻」を投げ込んで、魔術を見せろという。「私」は暖炉の中の「石油の火」を魔術で金貨に変える。しかし、欲心を起さぬよう金貨を火の中に戻そうとして、反対した友人ともめる。金貨を賭けて骨牌勝負をすることになり、「私」は勝ち続け、金貨に加え友人の全財産をも手に入られそうになったときに、遂に欲心を起こす。魔術を使って勝とうとしたその時、「私」の意識は急にあの部屋に戻り、「うす暗い石油ランプの光」を浴びたミスラと向かいあっているのである。

ここでの「火」である「暖炉」については、「私」がその火の中から金貨を生み出し、戻そうとする構図が見られる。葉巻の吸い殻を火に入れた友人については後ほど考察するからここでは省略するが、この空間の中で「火」を操る立場にあるのは「私」だといえる。魔術の世界の中では支配者的立場にあるのは「私」だが、この空間自体がミスラに仕掛けられた空間である。この空間におけるミスラの立ち位置を考えてみたい。

ここで、「暖炉」について述べられたバラモン教の書物を挙げてみたい。バラモン教の宗教文書であるヴェーダのうち、最も古い聖典『リグ・ヴェーダ』³には、暖炉にいる神をうたった一説がある。次に引用するのは、芥川の別作品にも登場する、火の神アグニへ送る歌の部分である。

「リグ・ヴェーダ」アグニへ

1、わたしはアグニをたたえる。祭司で神祇官の神、いけにえのすばらしい伝令官。

(中略)

8、われわれの奉納物の輝かしい番人、いけにえの輝き（であるあなたに）。

あなたが住む暖炉に包まれて大きくなる（あなたに）。

9、われわれのところにきたまえ、アグニよ。父親が子どもに対して示すやさしさとともに。われわれの味方に、われわれの恩人になりたまえ。

火神アグニとは、人間の王であり、保護者であり、主であると考え、人と神との仲保者といわれる神である。バラモン教が火に神への供物を

入れる儀式形態を持つため、火の神であるアグニは人間からの供物を天の神々に届ける仲介者の役割を持つようになったといわれる。バラモン教は「善因善果・悪因悪果」というギブアンドテイクの色が強い宗派であり、供物を贈り神々を讃える見返りに恩恵がもたらされるが、神々を邪険に扱うと罰が下るといふ考え方をしている。アグニはその供物の番人として非常に重要な神とされている。

さらにアグニはあらゆる火に存在することができ、人間界のどこにも存在し、家の主として全ての住居にいるともされている。そのため、この『リグ・ヴェーダ』の一説では暖炉に住む、と歌われているのであろう。このアグニの立場に非常に近いところに、魔術の世界内のミスラはいると考えられないだろうか。

ミスラは、自分が魔術によって作り出した世界の中で、その空間を支配する「神」に近い立場をとる。そのような位置づけをした場合、ミスラは暖炉を通して「私」の行いを監視し、恩恵として金貨を恵んでいる。そして、その恩恵に対し火の中に金貨を再び入れるという善行を返せるか、という因果的な構図を作って「私」を試したと考えられる。しかし「私」は金貨を返すことを止めてしまい、罰として魔術を習う資格を失ってしまふ。

「火」を操る支配者の立場を故意的に「私」に与え、ミスラ自身は「火」そのものの、宗教的な因果律の番人であり人間を監視する神の立場となつて「私」の行いを見定めていたと考えられる。

先ほど述べた、「吸いさしの葉巻」を暖炉の火に入れた友人については、火に物を入れているが、これが供物であるとは考えにくく、またこの人物が「火」を操る立場にいるとも考えにくい。この人物は、「暖炉」の描写のあとすぐに「私」に魔術を見せてくれと言ひ、魔術のきつかけ

を作る。このことと、この空間が「ミスラに仕掛けられた魔術空間」であることから、この人物はミスラの駒であり、「私」に対する試験を始めるきっかけとして使われたことが想像できる。

また、このアグニの登場する芥川の別作品『アグニの神』にも、因果的な構造が見られる。作中で神を邪険にしてしまった「お婆さん」は、アグニの罰を受けて死んでしまうという結末を迎える。作中では、アグニが妙子に憑依する際「青白い香炉の火の光を浴びた、死人のような妙子の顔」という描写があり、魔術世界に入る直前に「私」が見たランプの光を浴びたミスラの顔の描写とよく似ている。

このように考えると、芥川が細かいところまでアグニという神の設定を理解していたことになるが、それを示す文書もいくつが存在する。たとえば、「アグニの神」の草稿において、張氏の論文（注四）によると、『作品のタイトルは最初『アグニの神』ではなく『ヴァルナの神』だった』とされる。水を象徴する神ヴァルナは宇宙の法則や秩序を司る神で、人間のことを天から監視し、病氣や健康を与える。一見アグニと役割が似ているようで、芥川は草稿段階ではヴァルナの神を使おうとしていた。しかし、天から宇宙を監視する神が一個人の神降ろしにかかるとは考えにくいということで、人間により近いところにいるアグニの神に変更したのではないかと張氏は論じている。これは、芥川がバラモン教の神々に少なからず詳しかったことを示している。また、芥川の戯曲『青年と死と』（『新思潮』一九一四・九）にも、登場人物の台詞の中に「僕もとうに『ウパシニヤツドの哲学よ、さようなら』さ」や、などと、先ほど挙げた『リグ・ヴェーダ』らと同じバラモン教の一連の宗教文書の名前やその思想が出てくる。芥川がバラモン教の内容やその詳細を知っていたことは間違いないであろう。

従って、『魔術』を「火」を中心としたバラモン教的な読みでまとめると、このようになる。まずミスラが「火」に存在する神秘的な力を使い、「私」に魔術をかけることによって、術を使う資格があるかどうかを試そうとする。ミスラは魔術の世界の内部に因果律を作り出し、その中に「私」の意識を連れ込んだが、「私」は因果律より自らの欲心を優先してしまった。そのため、罰として「私」から魔術を扱う資格を剥奪した。

この読みは、欲心があるとなぜ魔術が使えないのか、という問いのひとつの答えになるであろう。先行研究では、欲心があることでミスラやハッサン・カンのように神秘的な力を操り、人間を超越した「超越者」になることができないから魔術が使えないのである、という論が多く見られるが、宗教的な面からミスラの立ち位置を、魔術をかけられた「私」にとって因果律を作り出し人を見定める「神」とほぼ同じ立場であると考え、試される「私」の欲心が宗教的因果律よりも勝りそれを破ってしまった場合、「私」に罰として魔術を使う資格を剥奪し、「それだけの修業ができていない」と追い返してしまう、というように考えることができる。

四

ここで谷崎の『ハッサン・カンの妖術』との比較論に移るが、なぜ芥川は谷崎の小説の人物を採用し、物語内における人物の立場を変えてこの『魔術』を書いたのであるうか。今まで『魔術』の宗教性について論じてきたが、谷崎と芥川のこの二作品に共通する「未知の世界、神秘の世界」に対してのアプローチの違いについて、先に挙げた岸氏の論文にて触れられている。岸氏は、谷崎は「未知の世界、神秘の世界を夢のように美しい幻想の世界として描き出して」いるとしている。それに対し

芥川は「超自然の世界を描いても（略）結局、夢の世界は人間にとっての幸福、人間とは何かを問う契機に過ぎない」とし、その世界は「現実へと解消されてしまう」と述べている。

確かに、芥川の宗教的な小説は、因果応報の要素はあるけれども宗教の力によって無償でハッピーエンドを迎えるということとは少ない。例えば、魔術の前年に発表された『蜘蛛の糸』、翌年に発表された『杜子春』の内容を比べてみる。『蜘蛛の糸』は地獄で苦しむ「健陀多」が「御釈迦様」の慈悲で救われそうになるが、自分だけが助かりたいという欲心からまた地獄へと落ちる話である。『杜子春』は、主人公の「杜子春」が「鉄冠子」という仙人に財を貰ったり、また仙人になるための試練などを受けさせられる。しかし、「杜子春」は仙人はなれない。この二作品を見ると、「極楽」や「仙人」という存在など、人知を超えた世界や存在に近づくためには、必ず試練や試練を与える人物が存在するのである。

『ハッサン・カンの妖術』は因果的な応酬が無いまま主人公は幻想的な須弥山の世界へといき、母と再会を果たす。『魔術』には幻想的な世界観の描写はほとんど見られず、円実も魔術の世界の中も室内で話が進んでいく。このことに関して、一九二〇年一二月の小島政二郎宛書簡の中で芥川は触れている。⁽⁵⁾

「魔術」は「蜘蛛の糸」程詩的でないから渾然としないのは当然です其代り「蜘蛛の糸」に無い小説があるでせう

これを見ると『蜘蛛の糸』にあつて『魔術』にないのは「詩的」な世界観である、ということが分かる。『ハッサン・カンの妖術』という神秘的な世界観を持つ小説を使ってこのように故意に「詩的」な部分を取り除いて書いたのは、やはりその世界観に関わってくる結末に差を出したかったからではないか。『蜘蛛の糸』と『ハッサン・カンの妖術』に

は「詩的」な世界観が共通しているともいえる。しかし、谷崎の書いた「私」は何も因果的行動をとってないに関わらず、須弥山の世界へ行き救済を受けているようにとれる。『蜘蛛の糸』は、糸を登り切った先にあるのは「詩的」である極楽であるが、『蜘蛛の糸』、そして『魔術』で芥川は、「詩的」な境地にたどり着く前に主人公を試し、監視する「御釈迦様」「ミストラ」という障害を登場させるのである。さらに、『魔術』では「私」に「詩的」な世界を全く近づけず突き放してしまう。これは、谷崎が『ハッサン・カンの妖術』で見せた、因果律に報われないまま救済される結末というもののへの対抗とれないだろうか。宗教的、神秘的な世界との間には因果律の壁があり、自身の欲よりもその因果に見合ったことを優先してしないと恩恵は無く、救済に繋がるその世界に入ることなどはできない、という意識の表れとも考えられる。

注

- (1) 岸規子「魔術」小論（『解釈学』一九九六・八）
- (2) 真杉秀樹「騙りの技巧―『魔術』論」（『解釈学』一九九二・六）
- (3) 「古代インドの神」（創元社 二〇〇〇・十一）
- (4) 張宜樺『芥川龍之介「アグニの神」論…神を超えた「運命の力」』（三田國文 二〇〇七）
- (5) 『芥川龍之介全集7』（筑摩書房 一九七七）